

サルは地域に必要なか？

農村社会との対話から見出す「研究」と「実践」を結ぶ新しい役割と可能性

鈴木克哉（特定非営利活動法人里地里山問題研究所／日本霊長類学会）

学問との対話・協働を求める社会の様相はさまざまあるが、ニホンザルはじめ野生動物が引き起こす人間の生活の軋轢は農村社会にとって喫緊の課題となっている。2017年度の野生鳥獣による農作物被害額は全国で164億円あり、ニホンザルは獣種別のワースト3に位置している。なお、これらの被害金額の算定には自家用作物は含まれておらず、住居への損害や家屋侵入、人に対する威嚇行為など、生活被害・精神的被害といわれる数値化が困難な問題も生じており、地域社会に与える負のインパクトは金額以上に大きなものとなっている。ただでさえ人口減少・高齢化社会が進化する農村の生活基盤を脅かす存在となっており、現場では「なぜサルが必要なのか？」という根絶を求める声がしばしば聞かれる。

こうした課題に対して、社会が最初に接点を求めたのはサルの専門家である。しかしながら「霊長類学」は霊長類を対象とした多種多様な研究アプローチを元に、ヒトへの進化の道のり、人間性の起源を明らかにすることを目指した「基礎科学」である。もちろん加害するニホンザルの生態・行動・社会等の基本的特性を知することは重要だが、それだけで被害は防げない。課題解決のためには、被害防止を目的とした「応用科学」が必要であり、その成果を速やかに社会に実装させるためには、現場での「実践」が求められた。

ニホンザル問題については、その後の被害防止に関わる多くの応用科学的研究や社会実験の積み重ねにより、今では被害軽減のための手法や個体群管理の方法論についてほとんどが整理されている。一方、野生動物管理には多様な「現場」があり、それぞれの空間スケールに応じた必要な役割を相補的に果たすことで、全体として効率的な管理を行うことができる。ところが、日本では野生動物との軋轢の問題は歴史的に浅く、専門的な職員が配置されている自治体は少ない。今後の課題は、いかにそれぞれの「現場」で管理を推進させることができるかという実践的な部分にシフトしてきているといえる。そして、この点において「研究」が貢献できることは限定的であると言わざるを得ない。問題解決のためには「研究者」だけでなく、新たな人材として「実践者」が求められている。

現場を動かす「実践者」に求められるスキルは、論文を書く能力ではない。研究成果を分かりやすく伝えるトランスレーション、関係者と円滑な関係性を構築するためのコミュニケーションやファシリテーション、現場状況に応じた企画力やそれを実行に移す際の

コーディネートなどの能力であり、時には科学的正論にこだわらず現場に寄り添うことも必要である。また、獣害のみならず、多くの農村が直面している人口減少・高齢化問題への対応など、関連する他課題を同時的に解決するビジョンも持ち合わせる必要がある。こうした牽引役を誰がどのように果たすことができるだろうか。演者はこの問題に対して、大学や研究機関から行政、そして現在は次のような民間組織へと立場を移し関わり続けている。

特定非営利活動法人里地里山問題研究所（さともん）は、地域の「獣害対策」と「活性化」を両立して支援する新たな役割の必要性を示すために兵庫県篠山市に設立したNPO法人である。野生動物管理の専門性を活かし、近隣市町行政と連携して計画立案や住民指導業務をサポートするほか、人口減少・高齢化で対策の担い手不足が問題となっている地域を支援するため、都市住民や地元高校生などの多様な人材が関わる場づくりを行っている。地域住民とともに、獣害から守り継承していききたい里地里山の豊かさを伝え、共感してくれる様々な人で共に守り、わかちあい、継承するネットワークを形成しながら、農村社会を持続的に支援していくためのソーシャル・ビジネス（社会課題解決のためのビジネス）のモデルを作ることを目指している。

サルはじめ野生動物と共生可能な地域づくりを実現するためには、単純に被害問題の解消だけを志すのではなく、地域の課題解決や活性化に貢献する「関係人口」を増進させて、地域に野生動物が存在することの「社会的な価値」を高めるなければならない。そのためには自然科学だけでなく社会科学を含めた多様な研究分野の知見を取り入れることが必要だ。また、「基礎科学」の成果を翻訳し、本来野生動物が有する「生態的な価値」を社会に伝えることも必要だろう。さらに、ニホンザル地域個体群を保全していくための単位や基準を検討していくことは残された大切な課題だ。今後さまざまな「研究」と「実践」をつなぎながら、創造的かつ柔軟に地域課題に対応する新しい役割の可能性を実証していきたいと考えている。

現状では地域にとってはネガティブな印象がぬぐいきれないが、本来、ニホンザルはじめ野生動物は豊かな里地里山の構成員であり地域の魅力の一つである。これからは農村社会と対話・協働し続けながら、「サルがいてよかった」という声が聞かれる社会を目指していきたい。

キーワード：ニホンザル、獣害、応用科学、実践、関係人口、ソーシャル・ビジネス